

2000. 1. 4

海の香り～ブラームス交響曲第2番

ブラームスは海の香りがする。

南国の海ではない、むしろ北方系の海だ。あるいはバルト海だろうか。ブラームスはこれを、スイスのウェルター湖畔などで書いたと言うが、僕にはどうしても湖を思い浮かべることができない。ましてやアルプスの田園などちっとも感じない

たゆとう水面、そこから様々に反射する光。きっと、とても深いのだろうか、と思わせる、ゆらめく波長の長さ。この曲から感じられるのは、そんなような感覚であって、海そのものではないのかもしれない（少なくとも、砂浜とか、岩ばかりの磯とか、そこに打ち寄せる波とかいったようなものを全く感じさせない。）。しかも、海の香りがする。

いや、むしろ、そんな海を見つつ、岸壁に座り、足をぶらんぶらんさせている人の姿——その人が海面を眺めている、瞳の中の風景であるような気がする。

海は生命の母と言われ、それは「抱擁」という意味に等しく使われているようにも思える。ところが、この曲から想起される海には、母性的な香りがしない。むしろ父親を感じさせる。

そう…肩に手をどっしりと置かれているような「ごっつい」感覚とでも言おうか。

そうなのだ、この曲から感じられるのは、海そのものではない。海に寄り添っている人が感じている「父の香り」だろうか。

きつとこのような感じ方は、僕自身の記憶、育った環境などが影響しているのだろうと思うが、それにしても、この曲の持つ、懐の深い、そして波長の長い、たゆとうような感覚からは、海の香りがする。

いつもというわけではないが、ふと気が付くと傍にいた、というような父親の匂いとともにも…。